



コレクター

いかるが つみき

もくもく……

目を瞑つむっていると、もくもく、もくもく、

煙がたちのぼるみたいに、もくもく、

もくもく……

耳の付け根から、髪の毛の生え際から、にのうでの

袖口から、もくもく、もくもく、

膨らんで、包み込んで、

もくもく……

私の中に私はいない。私は私に依っては決定されない。私は常に誰かに依って染められる。

白——雲のような。

掴もうとするには遠すぎて。掬いとろうとしても霧の中。捕らえようと目を凝らしても、それは、はれて消えていく。そもそも、唯の粒。もくもく……

そのうち、隣の雲が大きくなって、瞬く間に、また次の雲が現れて、さつき手を伸ばした雲の色

もすぐに忘れて過ぎていく。

もくもく、

もくもく……

私には本来キャラクターがない。それは常に私でない誰かに依って定義される。君これこれは是々だね、と。他力本願のアイデンティティ。

軽薄。咎めながらも、湧き起こる新たな色彩の鮮やかさに魅せられ、腕を拡げずにはいられない。

目を閉じる、

もくもく……もくもく……

新しい風に乗って、膨らんでいく空想を、

じやまするな、

私は、黙々と拡がっていく雲の中に身を委ねるだけ。

私は私ではない。私はあなたに依って染められる、生成りのキャンパス。



私は女子で、あなたは男子だった。

「男勝り」だと、あなたは云った。

女の子でいることなんて詰まらないと思った。私は誰よりも速く走れたし、誰よりも強かった。多分。対等であることになんの疑問も無かったし、認め合って生きていくものだと思っていた。できることなら男に産まれたかった。

今ではもう遠いあの日、あなたと私は常ものように、夕焼けの映える土手の下で、無邪気に追いかけていた。私の脚はあなたより少しだけ速かった。当然ふたりとも、遊びだけど必死になって互いを追いかけていた。陽の沈む間際、クラスメートの男子が3人、自転車で土手を通りすぎていった。彼らは上から、私たちを指さし、眺めていた。

その後からだ。あなたは私と闘わなくなった。闘えなくなった。私はまだ、誰よりも強かったし、少なくともまだ、あなたより速く走ることができた。でも、もうあなたも誰も、私と本気で競い合う積もりはないみたいだった。私とあなたは対等でなくなったのだ。

私はいつまでもあなたと走っていたかったし、競っていたかった。

私は優等生で、あなたは落ちこぼれだった。

「お高くとまってる」と、あなたは云った。

自慢ではないが、勉強が得意だった。教育制度の模範になるのは癪ではあったが、それ以上に単純に、知識が増えていくことの方が楽しかったし、促された課題をこなしておくことに疑問はなかった。こんな云い方はよくないのだろうが、テストの点が悪いクラスメートの存在が判らなかつた。授業をきいていけば答えられそうなおとばかり。なぜ、あたり前のことができないのか、疑問しか浮かばなかつた。他のことだつてそうだ。大抵のこと——どうしても義に反するようなことがない限り——大人の云うことに従つて（あるいは振りでもして）いれば、問題なんて起こらない。無駄に抗つたところでもなにも生まれない。

私は常もあなたを詰つた。無気力なあなたをどうにも許せなかつた。それ以上に、私との間にはつきりと境界線を引いてしまったあなたに、なんとか声を掛けようと、その手段だつた。私はあなたにつらくあたつた。一種のサディズム、あなたに反撃されるのも判つていて、確信的なマゾヒズムを含んで。

私はあなたの世界を共有したかつた。

常もより茜い夕焼けの放課後、帰りがけのあなたの背中を見送つた。あきらめのまなざしで。



私は初心者で、あなたも初心者だった。

「初めて」だと、あなたは云った。

それをきいて、私も恥じらうように頷いた。互いに頭の中でしか考えたことがなかった。空に浮かぶ雲のような概念。ドラマか、漫画か、よくば小説。抽象的なイメージを抱いていたにすぎなかった。

話をする時は、起承転結、順序を踏まえて話した。結論を導く為の本論を、序論を怠ることなく話した。本をよく読む人だった。ふたりが知覚する世界を、こと葉で形づくろうと必死だった。先人に学ぶことを怠らなかつた。勤勉。それか、慎重だったのか。

私といえば、あなたのこと葉にひとつひとつ頷くだけ、飲み込むことで精一杯。

私たちはまるで、ドラマか、漫画か、小説を説明書に、取り扱うかのようにひとつひとつ試していった。私たちは物語に入り込んで演じていた。ドラマか、漫画か、小説か、……よくば文学の中で。

私は玩具で、あなたも玩具だった。

「好奇心が強い」と、あなたは云った。

活字にしなければならなかった。手を繋ぐことも、抱きしめ合うことも、すべて文字に置き換えなければ理解できなかった。小説のように。

私たちは唯台本をなぞっていた。文字は紙に刷られたインクの塊でしか無く、私たちの身体は体温をもつているものと判っていた。しかし、幼い私たちには、現実を物語として捉えなければ、押しつぶされてしまいそうだった。どこかできいたような話は、期待と、失望と、傲慢と、倦怠とを繰り返した。活字で理解できても、現実にはリアルさが乏しい。考えてみれば、小説というもの自体、著者でさえ全くの空想から物語を紡いでいるのかも知れないのだし。

それでも、私たちにできることは、拙く幼く、行為に名前を付けていくことだけ。世界が創り出された時のような、ふたりだけの秘められた神聖な儀式のようでもあった。しかし、簡潔に云えば、子どもが遊びを通して世界を知覚するようなもの。私たちのしていたことなど、遊びにすぎなかった。

玩具はやがてくたびれ、疎んぜらるる。あなたは飽きて、私も飽きていった。



私は姉で、あなたは弟だった。

「世話焼き」だと、あなたは云った。

それはいづれ、女が母になる為に植え付けられた遺伝子で、母性と云われるもの。能動的に培っていくものではない。強弱の問題。

私たちは歳がおなじで、背がおなじ。出身も近かった。だいたいおなじ学力だったし、趣味も似通っていた。唯少しだけ、あなたの方が幼くみえた。それは、体格や顔立ちというよりは、その子どもじみた明るさと、無邪気な笑顔がそうさせていたのだろう。屢々、飼いや慣らされた犬をみた時のように、髪を撫でたい衝動に駆られていた。

そんな訳で、なにかにつけ私が率先していたのも自然な成り行きだった。それに、なによりあなたの為になるのが楽しかった。

待ちあわせは私が決めた。行き先はだいたい私が決めた。時にはお弁当を拵えたり、時にはあなたの部屋を片づけに訪れた。うんざりしたように欠伸をするあなたを叱り、たしなめた。あなたは更に倦んだ眼差し、浅く微笑んでいるだけだった。

私は妹で、あなたは兄だった。

「守ってあげたい」と、あなたは云った。

あなたは常も曖昧で、調子がよくて、不誠実に思えた。それはいづれ、男が父になり、子に与える優しさ、そして力強さになるのだろう。

だいたいお喋りするの私だった。あなたはそれに頷き、応えてくれる。飽くことなく、子どもじみた笑顔が浮かべて。おおらかでいてくれることは、なにより癒しだった。「常もその調子だ」と、苛立つことも少なくなかったけれど。

あなたの世話を焼いている積もりで、結局は委ねていた。私の意志を決定してくれるのはあなただった。背中を押して貰わなければ進めなかった。あなたは知っていた。私の心の中に、産まれたての、繊細で傷つきやすい小さな女の子が身を潜めていることを。その子を庇う為に、私はできる限り喋り続けていた。こと葉は不安を払う光で、身を守る壁だった。あなたは腕を組み、深く椅子に凭れて、私の話をきく。そして、力強く笑うのだ、

「そうだね。」

時が来て問うた、私たちはなんなのか。家族は愛せても、恋はできないものなのだ。



私は神秘的で、あなたは世俗的だった。

「なにを考えているか判らない」と、あなたは云った。

私にすれば、これ程明快なことはない。なにより簡単で単純に、唯ひとつ、あなたに焦がれてる、それだけだった。他のものなんて、目に入れる積もりなどなかった。

あなたは話す時に、真っ直ぐ、目をみて話す。いかにも誠実そうな黒縁の眼鏡、息継ぎの合間に中指で直す、その仕草が気に入っていた。

こと葉はもどかしいものでしかなく、正直云ってしまえば、あなたが話すこと——ニュース、テレビの話題、友人の噂、自分の生い立ち——など、どうでもよかった。それが、そのかけらが、なんの意味も持たないこと葉たちが、ひどく矮小なものでも、私たちを繋いでいるのだと思えば慈しむこともできた。しかし、それでも、私たちだけの話をしていなかったし、私だけをみていて欲しかった。他はどうでも構わない。

私は、話したいことだけを話した。みたいだけ、あなたを見詰めていた。それ以外は上の空だった。雲のように移ろっていた。

私は天然で、あなたは常識人だった。

「目が離せない」と、あなたは云った。

私は耳の前に垂れた、ウェーブした髪を指で回しながら、あなたのこと葉をひとつひとつ篩ふるいにかけていた。撒かれた瞬間、餌に飛びつく小鳥のように、恋のこと葉に素早く笑顔で応えた。

雑誌も、携帯も煩わしい、相変わらず目をみていないと話せない性分らしく、手は膝の上に礼儀正しく置かれていた。私はそれが嬉しかった。唯の癖であっても、これ以上に見詰めて貰えることなど無い。そして——幾分意地悪に——それを逆手にとって、話題が変わってしまいうそうなら目をそらした。無用な話を遮る為に、なにかに気づいた振りをして、わざと振り向いたり、突然思い出したように話を始めて、ふたりだけの話題に戻した。

あなたの視線をすべて私に向けておきたかった。気紛れな猫のように、ころころ、怒ったり、泣いたり、笑ったり、上の空だったり、全部、もっと私をみて欲しい、もっと私を追って欲しい、あなたに飽きられてしまわないよう、必死で、必死で繕っていた。平穩でいるよりあなたに注目されるであろう、不器用な手段だった。そういう意味で、私は不安定な、不可思議な存在だったのかも知れない。

ついでいけない。一言だけだった。



私はペシミストで、あなたはオプティミストだった。

「思慮深い」とあなたは云った。

いつもバッグの中に本を持ち歩いた。たいていは戦前の文学で、黴の臭いのする、茶色く煤けたものを好んで読み耽っていた。

古い語彙には、感情の機微が細かに映し出されていて、そのひとつひとつを心の中に再現しては、しかし、今の世の中では、表情に、感情に、形容ことも伝えることも難しい、と嘆いていた。

休日になっても部屋から出ず、ソファに腰をかけて本を読む。眼鏡はレンズの薄い、細めのシャフト。

あなたは、そっと寄り添った。始めに眼鏡を奪われた。私は、まだ本を開いた儘、先の展開ばかりを気にしていた。活字は既にぼやけて、背中から感じる体温は全身へ広がり、やがて私を、どうやって包み込んでいくのか、筋書きばかり気にしていた。展開を構想した。あなたがどんなこと葉を発し、どんな表情をして、どんな行動をとるのか。

あなたの手を握り返すまでに、不器用なくらい時間をかけてしまっていた。

私は神経質で、あなたは情熱家だった。

「心配性だ」とあなたは云った。

未来のことばかり考えていた。失敗はしたくなかった。人間が手にし得ない永遠性について、その一端であっても、真理に近づきたかった。

あなたは私に、現在を、今を、謳歌することを説いた。慎重でいたかった。花に譬えられることに抵抗があった。端麗だが、短く儂く、情熱を枯らして終うのは厭だった。育ち、花開き、結実し、枯れてゆくのだろう。いざれ楽しい時も薄れ、やがてすれ違ふ。よくば、老い乾いた愛情とともに、また人生を歩むのかもしれない。しかし、私は厭だった。どんな時も、変わらずに愛していたいし、その為には、全体的に温度を下げて構わない。昇り詰めた情熱は、峠を返したら冷めるのだろう。私は、冷めるくらいなら平坦に情熱を注ぎ、愛したいと思う。必要なら平熱を上げる努力をすればいい。その為には慎重に、ストイックに抑制したし、なにより、時期を問題にした。

あなたとずっと一緒にいたかった。

しかれど、時の感じかたは人それぞれなのだ。単純な女の方がふさわしかった。



私は純粹で、あなたは誠実だった。

「まるで少女のよう」だと、あなたは云った。

目をそらしてただけだ。陽向の方だけをみていたかった。

その時私は疲れていたんだと思う。仕事に、恋に、人間関係に。忘れようとしていたんだと思う。なにも知らない振りをして、世界から目を瞑つむっていた。自分のリズムを戻す為に、焦らないよう、怒らないよう、呼吸を整えて、努めて力を抜いていた。夢みているように、焦点を定めず、たゆたっていた。私は唯、笑って、雲のように白い服を着ているだけだった。

大きな手をした人だった。憚はばりもせず、手を繋いだ。低い声の人だった。ふたりで話すとコーラスのように、音を補って、調和していた。どちらも厭味がなく、性格が表れて、概して心地よかった。

私はあなたの前でよく笑った。なにごとも心配ないような顔で。私はよくあなたの手を握った。体温を分け与えるように。私はあなたをよく励ました。まるで世界が幸せで満たされているかのような理論で。私は決して怒らなかった。できるだけ白い服を着た。

私は無垢で、あなたは努力家だった。

「君の為に」と、あなたは云った。

私は小さな子どものように、楽しいことと嬉しいことにのみ、一途に喜んだ。哀しみと怒り、世界の半分は削ぎ落として、しかし、それはふたりには必要ないもの、とも。

あなたは私の前で、よく強がってみせた。なにも心配しなくていい、と謂わんばかりに。あなたはよく私の手を握った。私を温めてくれるように。あなたはよく私の髪を撫でた。まるで、世の中に怖いものなどないかと思ひ込ませるように。私は唯笑った。風の通る白い服を着た。

あの人は常いっも頑張っていたのだと云う。常も笑ってくれる私の前ではよくよしないように。常も励ましてくれる私の前では泣き言を云わないように。儂く世界を見詰める私の前では、遅しく、護るような態度で。それは重い荷物だったらしい。

その女に愚痴をぶつけていた。その女に泣き言を云っていた。その女に甘えていた。しかし、あの人は自らの不貞を嘆き、苦しんだ。そして、その痛みから逃れる為に、尚もその女に逃げた。憔悴していた。

結局は裏切られた。私は白い服を着ていた。なにも判らないようなそ振りをして、笑った。



コレクター

NDC 913 14 p. 257mm × 210mm

2012年1月10日第1刷印刷 2012年1月15日第1版発行

いかるがつみき文 知古^{きこ}つとむ絵・選本 印刷・発行／知古文庫

『たらればの世界』 <http://ameblo.jp/tarareba-world/> narakohen@gmail.com
『Leas』 <http://www2.tba.t-com.ne.jp/hagami/less/> hagami.ec@gmail.com
乱丁・落丁ございましたらご一報ください。ご意見・ご批判は著者が傷つかない程度でお願い致します。

所
有
権
者
の
印

©2012



